

『すべてを行う神』（エズラ 1：1～11・イザヤ 45：7）

【開会聖句】

イザヤ

45:7 わたしは光を造り出し、闇を創造し、平和をつくり、わざわいを創造する。わたしは主、これらすべてを行う者。

<序論>

・本書は、元々、ヘブル語原典では次の「ネヘミヤ」と合わさって一つの書物だったそうです。それが今のように分かれたのは 15 世紀（宗教改革以降）になってからのことだと言われています。内容は、前半の 6 章までがバビロン捕囚からの帰還と神殿の再建について。そして、後半の 7 章以降はエズラの帰国と彼が行った改革についてです。本書の名前となったエズラは祭司であり、7 章 6 節では『モーセの律法に通じている学者であった』と紹介されています。それは彼が行った改革がモーセの律法に基づく改革であったということを示していると言えるでしょう。

<本論>

1. 主はキュロスの霊を奮い立たせ

1 節冒頭の『ペルシアの王キュロスの第一年』というのは、年代で言うと紀元前 538 年のことになります。キュロスがペルシアの王になったのは、その 19 年前の紀元前 557 年ですが、先程の「第一年」とは、ペルシアの王になった第一年のことではないんです。キュロスは、伝承によると、紀元前 576 年ごろ、ペルシアの王子として生まれたようですが、その当時のペルシアは小国で、メディアという大きな国の属国でした。しかし、彼は相当なやり手と言うか、野心家だったのでしょうか。宗主国のメディアを滅ぼし、遂には古代オリエントの覇者であった新バビロニアをも滅ぼし、紀元前 539 年 10 月 29 日にバビロンに入城し、自らを「諸王の王（キング・オブ・キングス）」と称して、自分の王朝アケメネス朝を打ち建てます。そして、その翌年、今朝の 1 節の年ですが、紀元前 538 年に、所謂「キュロスの勅令」というものを発して、バビロン捕囚にあったユダヤ人や同じように強制移住させられていた諸国の民を解放するんです。キュロスは自分が征服した国の人々を寛大に取り扱うという、所謂、宗教寛容政策を採ったことで知られています。それが今朝の 1 節、そして 4 節までに書かれていたことなんです。2 節以降の『』で括られた部分は、キュロスの帰還許可の勅令をユダヤ人向けに書き直したものだと考えられています。

そして、『エレミヤによって告げられた主のことばが成就するために、主はペルシア

の王キュロスの霊を奮い立たせた』とありましたが、主はかつてエレミヤに告げられた預言。「エレミヤ」25章、或いは29章10節の『まことに、主はこう言われる。『バビロンに七十年が満ちるころ、わたしはあなたがたを顧み、あなたがたにいつくしみの約束を果たして、あなたがたをこの場所に帰らせる』という約束を、異教の神々をも崇拜するペルシアの王キュロスの霊を奮い立たせることによって成就されたわけです。本当に不思議なのですが、聖書の神様はユダヤ人だけの神ではなく、ご自分を信じるか信じないかに関係なく、すべての人間にとってただ一人の真の神であるということに改めて思われます。そして、その真の神は、私たち人間の霊を奮い立たせることによって、言い換えれば、人間に志を与えることによって、ご自身のみこころを行われる方なんです。

『神はみこころのままに、あなたがたのうちに働いて志を立てさせ、事を行わせてくださるのです』(ピリ 2:13)。

それは今の私たちも、キュロスとはだいぶスケールは違いますが、同じだと思うんですね。自分も定年の年齢を過ぎて、ここでご奉仕できるのもそんなに長くはないと思いますが、たとえ、いくつになっても、元気であれば元気なように、そうでなければそれなりに、神様はその時々に応じて志を与えてくださる方だと思うんですね。昔、「青年は荒野を目指す」という歌がありましたが、いくつになってもそんな風に歩めたら素晴らしいですね。

2. 主の山には備えがある

そして、5節。そのキュロスからの勅令に応じて、ユダとベニヤミンの一族のかしらたち、祭司たち、レビ人たちは立ち上がった。それは、エルサレムにある主の宮を建てるために上って行くように、神が彼ら全員の霊を奮い立たせたのである、とありました。さらに6節。

『彼らの周りの人々はみな、銀の器、金、財貨、家畜、選りすぐりの品々、そのほか進んで献げるあらゆる物をもって彼らを力づけた』(エズ 1:6)。

神が奮い立たせてくださった霊、志は、その人だけにとどまることなく、人から人へと伝わり、良い意味で周りの人たちを巻き込んでゆくということでしょう。

7節以降には、かつてバビロニアの王ネブカドネツアルがエルサレムの神殿、主の宮から持ち出して、自分の神々の宮に置いていた器を、キュロスが命じて運び出させたことが記されていました。バビロン捕囚から数えて70年が経っていますので、ユダの首長シェシュバツアルを始め、帰還する人々は、それらの器、宝物と言っていると思いますが、それらの物を初めて目にして大いに驚き、そして、喜んだことでしょう。それは帰還する人々を励まし、勇気づけるために神様が用意してくださったものだったように思えます。私たちも、すべてを失ってしまったように思える時があったとしても、神は必ずご自分の民のために備えていてくださるということではないでしょうか。まさに、「アドナイ・イルエ（主の山には備えがある）」(創世 22:14)。

<結論>

そして最後に、今朝の箇所で言及されていたエレミヤの預言のさらに前。この時から数えて 160 年ほど前になされたイザヤの預言も見ておきたいと思います。今朝の開会聖句の少し前の「イザヤ」44 章 28 節をご覧ください。

『キュロスについては『彼はわたしの牧者。わたしの望むことをすべて成し遂げる』と言う。エルサレムについては『再建される。神殿はその基が据えられる』と言う』(イザ 44:28)。

ここにキュロスの名前が出てきますが、彼は「わたしの牧者」と呼ばれています。さらに、次の 45 章 1 節では『油注がれた者』とも呼ばれています。それは、神から命じられた特別な働きを行う者という意味です。そして、45 章 4 節には、『わたしのしもべヤコブのため、わたしが選んだイスラエルのために』とあり、『あなたはわたしを知らないが、わたしはあなたに肩書きを与える』(同 45:4) と言われています。確かにキュロスは、イスラエルの民のために特別な働きをしました。しかし、先程も申し上げましたように、彼自身は主だけを神として信仰したわけではなく、主がどのような方であるかを知ることなかったのです。イザヤは次のような神のことばも告げています。今朝の開会聖句です。

『わたしは光を造り出し、闇を創造し、平和をつくり、わざわいを創造する。わたしは主、これらすべてを行う者』(同 45:7)。

これは、この歴史を動かしているのは、キュロスのような権力者ではなく、トランプでも習近平でもプーチンでもない。主お一人だということですね。私たち人間には、光も闇も平和もわざわいも創造すると言われる方のみこころのすべてを知ることにはできません。しかし、聖書が証言している最も大切なことは、その方は、私たち人間に良いことをしてくださったということです。それは、私たちを罪による捕囚から解放するために、ご自身のひとり子であるイエス様を救い主として遣わしてくださったということです。

今週も、この「良い方」だけを信頼して、歩んで行きましょう。